

「私のイチバンボシ」
第1話

水瀬真理佳

○ トイレ・パウダールーム内

制服を着た宮本えま（17）、鏡の前でメイクをしている。ビューラーでまつげを上げ、マスカラを塗る。台の上にはミニヘアアイロンとメイクポーチ。

えま、リップを塗り、唇でパツと音を立てる。

全身鏡の前でスカートを二回折る。

鏡で後ろ姿を確認しながら、

えま「どう？ 変じゃない？」

と、親友・高橋桃香（17）に尋ねる。

桃香「バツチリ。超可愛いよ！」

えま、はにかむ。

桃香「じゃあ、彼に会いに行きますか」

えま「はい！ お願いします！」

○ 渋谷スクランブル交差点

人が縦横無尽に行き交う。

○ 同・歩道

信号待ちをしている歩行者の先頭にえ
まと桃香。大型ビジョンを見上げてい
る。

桃香、眩しそうに太陽を手で遮りなが
ら、

桃香「おぉー！」

ビジョンにはアイドルグループ
UNiCrown(ユニクラウン)のプロモーション

ンビデオが流れている。

えま、スマホで動画を撮りながら無言
で感動を嘯みしめる。

アイドル・田中陽斗(25)がアップで
映る。

えま、満面の笑み。

桃香「田中さんも通りすがりに見に来てたり
しないかな：：？」

桃香、信号待ちしている人たちをキョ
ロキョロ見る。

えま「さすがにこんな人が多い所には来ない

よし！　ていうか来れない！」

桃香「そりゃそうか。気づかれたら渋谷がとんでもないことになるね」

○同・車道

車用信号が赤になり、黒い乗用車が停止線で止まる。運転席にはマネージャ・佐藤大樹（23）の姿。後部座席はスマートフォンで見えない。

○同・横断歩道

歩行者用信号が青に変わり歩行者が渡り始める。

えまと桃香も歩き出す。

桃香「まずはどこから？」

えま「とりあえず、タワレコかな！」

桃香「りよーかい！」

○同・車道・乗用車車内

陽斗、後部座席の窓から大型ビジョン

を見上げる。

ビジョンにはユニクラウンのプロモーションビデオが流れている。

佐藤、窓越しにビジョンを見上げて、

佐藤「映像流れてますね」

陽斗「写真撮ったとこっ」と

陽斗、スマホを構える。メンバー・杉

野翼（26）が映ったタイミングで写真

を撮る。

陽斗、写真を見て口角を上げる。

車用信号が青に変わり、車が動き出す。
4

○タイトル「私のイチバンボシ」

○テレビ局・外観

○同・スタジオ

歌番組の収録中。

ユニクラウンのメンバー・加藤柊也

（26）、翼、佐々木悠真（25）、中村

凛太郎（25）、陽斗が煌びやかな衣装を着て、キレのあるダンスと歌を披露。
陽斗、カメラアップになりセクシーな表情を見せる。

○同・楽屋

ユニクラウンのメンバー、着替え中。

陽斗「ねえこれ見て！」

陽斗、メンバーに渋谷で撮った写真を見せる。
メンバーが寄って来る。

柊也「（わざとらしく）よくいる顔だなあー。

この人陽斗の知り合い？」

悠真「（わざとらしく）この人なんか翼くんに似てない？」

凛太郎「（ニヤニヤしながら）佐々、それはこの人に失礼だよー」

翼「おーい！ 公開悪口やめい！ 失礼はお前だよ凛！」

翼、凜太郎の肩に手を回し、チヨークスリーパーを決める。

凜太郎「ごめっ！ ギブ！ ギブ！」

と、翼の腕を叩く。

じゃれ合う二人を柗也、悠真、陽斗が

微笑ましく見守る。

× × ×

ダラダラ着替えるメンバー。

陽斗、一人着替えを済ませて荷物をま

とめる。

柗也「陽斗この後移動？」

陽斗「そう。撮影入ってて」

陽斗、荷物を持って楽屋入口に向かう。

翼「陽斗ファイト！」

悠真「はるピ！お疲れ！」

凜太郎「はるピ！頑張っ！」

陽斗「サンキュー！お先！」

陽斗、楽屋を出る。

凜太郎「はるピ！ドラマもあるし忙しそうだ

よね」

柊也「多分今この中で一番忙しいよな」

と、翼の方を向いて話す。

翼「俺もそれなりに忙しいからな!? 今日だ

って夜ラジオの収録あるし……」

柊也、ニヤけるのを必死に堪えて、

柊也「別に俺なんも言っていないじゃん！」

凛太郎「へニヤニヤして〜誰も疑ってない

よ！」

翼「へ嬉しそうに〜おい！笑ってんじゃね

いか！みんな俺のことイジりすぎ。俺に

このイジりしているのは世界で有吉さんだ

けだから！」

柊也「正直さ、杉野この前番組でイジっても

らってから、このネタすっかり味を占めた

感あるっしょ？」

凛太郎「絶対そうだよ！このネタでイジ

られてる翼くん、超生き生きしてるもん」

翼「いーだろ別に！せっかく俺が輝けるイ

ジりを有吉さんが見つけてくれたんだか

ら！みんなしてバカにしやがってー」

悠真「大丈夫、翼くんが頑張ってるのはみんな知ってるよ」

と、翼の肩をトントンとする。

翼「悠真、お前はほんとにいい奴だよ！」

翼、悠真の後ろから柗也と凜太郎を睨み見て舌をべーっと出す。

柗也と悠真と凜太郎、手を叩きながら爆笑。

○ C D ショップ・店内

ユニクラウンの棚にはCDが敷き詰められ、店員のポップで飾られている。えま、商品を陳列中の店員に話しかける。

えま「すみません。ここ写真撮ってもいいですか？」

店員「どうぞ」

えま、陽斗のアクリルスタンドをかざしながらブースを撮影。

えま「よしOK！」

桃香 「次は？」

えま 「次は地下鉄のこの広告！」

○ 渋谷駅・副都心線・通行路

ユニクラウンの巨大広告とその前で撮影しているたぐさんのファン。

えま、陽斗の写真の前で寄り添うように立つ。手でハートマークを作ったり陽斗の頬に指を当てたりする。

桃香、えまを撮影。

桃香 「どうかな？」

桃香、スマホで撮った写真をえまに見せる。

えま 「もうバッチリ！ ありがとう！」

桃香 「次は？」

えま 「次は T S U T A Y A ! 　そこで最後です！」

○ 書店・店内

ユニクラウンの書籍コーナーにメンバ

―が表紙の雑誌が陳列されている。
えまと桃香、陽斗の棚の前の列に並ぶ。

× × ×

桃香、えまと陽斗の棚を撮影。

桃香「撮れたよ」

えま、写真を確認する。

えま「さすが桃香！」

桃香「他はもう大丈夫なの？」

えま「満足そうに」うん！ありがとう！

○カフェ・店内（夕方）

えまと桃香、席に着く。テーブルのドリンクの横に陽斗と亜蘭（20）のアクリルスタンドを置いて各々撮影。

えま「付き合ってくれてありがとうとね！」

桃香「全然いいよ！普通に楽しかったし。

飲みたかったやつも奢ってもらっちゃったしね！」

えまと桃香、乾杯してドリンクを飲む。

桃香「それにしてもユニクラウンの人気はす

ごいね！ 渋谷ジャックの規模もすごいし。
さすがは天下のS・S（エスエス）エンタ
ーテインメント！」
えま「でしょ？ ファンミとかもガンガン企
画してくれるの。応援した分ちゃんとかっ
ちに還元してくれるから本当にありがたい。
もう課金が止まらなくいい」
桃香「この前当たったって言ったのは、今
回発売のアルバムのツアーってことだよ
ね？」
えま「そう！（小声で）今回めちゃくちゃ
いい席だったの！」
桃香「さすが。えまの運の強さは本物だね」
えま、ドヤ顔で頷く。
えまたちの斜め前に女子高生が二人。
その会話が聞こえてくる。
女子1「ねえ、昨日の見た？」
女子2「私もあのドラマ見るのやめちゃっ
た」
女子1「えー！ 今すごい面白いのに！」

女子2 「もう田中陽斗はもういいよって感じ。
さすがに見飽きた」

えま、ピクっと反応する。

桃香、「あちゃー」という顔。

女子1 「確かに。ここ最近ドラマとか映画と
かずっと出てるよね」

女子2 「大して演技上手くないんだから、余
計なことしないでアイドルだけやっとけよ
って感じ」

女子2、悪気なく話す。

えま「ニコニコしながら」ちよっと話つけて
くるね」

と、立ち上がる。

桃香「コラコラ。落ち着きなさい」

と、えまの手を掴んで座らせる。

桃香「言いたいやつには言わせとけばいいよ」
えま、反論したそうな顔で桃香を見る。

えま、チッと舌打ちをする。

えま「一生息が臭くなる呪いかけてやる！」
と、女子高生を睨みながらストロークを

口に含む。

桃香「そんなおめめクリクリの子犬みたいな
可愛い顔で舌打ちなんていけません！ 禁
止！」

と、えまの両頬をつまんで引っ張る。
えま「いひゃいひゃいひゃい（痛い痛い）」

桃香、呆れ笑いする。

桃香「推しのこととなると、ちょーっとオラ
オラしすぎるのが唯一残念なんだよねえ」

えま「普通だよ。だってもし亜蘭さんに酷い
こと言ってる人がいたらどうする？ 桃香
黙ってられる？」

桃香「（真剣な顔で）うん、とりあえず『表出
ろ』だね」

えま「桃香の方がよっぽど物騒じゃん」
えまと桃香、笑い合う。

○宮本家のマンション・外観（夜）

外門の奥に高層マンションがそびえる。

○同・宮本家・リビングダイニング（夜）

キッチンから見渡せる広々としたリビングダイニング。ダイニングのテーブル上にはオシヤレに盛り付けられた料理皿が五つ並ぶ。母・宮本美香（48）、皿の配置を変えながら、一眼レフで撮影をしている。美香の足元では犬のカーリー（5）がご飯を狙っている。

えま「ただいま」

と、入って来る。
カーリー、えまに駆け寄る。

えま「ただいまカーリー。よしよし」

えま、しゃがんでカーリーを撫で回す。

美香「（ニコツと）おかえり！　ごはん食べる？」

えま「うん！　着替えてくるー！」

と、廊下に戻って行く。

× × ×

部屋着に着替えたえま、美香の前の椅

子に座る。

美香「どうぞ召し上がれ」

えま「いただきます！ 今日も今日とて美味しそ〜」

えま、手を合わせておかずを次々と自分のお皿に乗せていく。

美香「桃香ちゃんどこ行って来たの？」

えま「渋谷！ もう超暑かったあ〜」

美香「まだ九月だからねえ」

えま「今ユニクラが渋谷ジャックしてるの」
えま、美香にスマホで大型ビジョンの

映像を見せる。

美香「わーすごいね！ もしかしたら陽斗くんもお忍びで見に来てたりするんじゃないか

い？」

えま「それ桃香も同じこと言ってた」

美香「そういう想像したり、好きな人が今何してるんだろとか考えるの、楽しくない

い？」

えま「陽斗くん今何してるんだろ。まだお

仕事中かなあ？」

えま、壁掛けの時計を見る。時刻は

19 .. 30。

○撮影スタジオ・中（夜）

シャッター音が鳴るスタジオ。

陽斗、白い背景の前で次々とポーズを

決める。

川上「いいいねえ」

カメラマン・川上（43）、シャッターを

切り続ける。

× × ×

陽斗、カメラマンと編集・遠藤（29）

とデータを確認。

川上「これとかいい顔してるよ」

陽斗「なんか恥ずいですね」

と、照れ臭そうに笑う。

川上「どう？」

遠藤「これでいきましよう！」

スタッフ「撮影上がりです！ お疲れ様でし

た！

スタッフ陣、陽斗に向かって拍手する。

× × ×
陽斗、全方向にお辞儀する。
スタッフ、片づけ中。

陽斗「遠藤さん！」

遠藤「？」

陽斗「この間は中村がお世話になりました。」

撮影すごい楽しかったって言ってました」

遠藤「良かったです！今度田中さんとペア

の企画とかも面白そうだねって編集部で話

が出てるんですよ」

陽斗「ほんとですか!? ぜひお願いします！」

遠藤「ソルトプリンスを徹底解剖って企画も

持ち上がってるので」

陽斗「(苦笑して)うわ、マジですか」

川上「なにソルトプリンスって」

遠藤「ファンからの愛称です。田中さんライ

ブとかではクールで塩対応だから、ソルト

プリンス」

川上「へえ〜！（からかって）じゃあまた
な、ソルトプリンス！」

陽斗「（嬉しそうに）あ〜これ絶対次もイジラ
れるやつだあ！ お疲れ様です」

川上、帰宅。

メイク・水野（30）が寄って来て、

水野「田中くんだドラマ見てるよ！ 毎週リア

タイしてる！」

陽斗「ありがとうございます！ この前教え

てもらった日焼け止めたっぶり塗って撮影

してます。日焼けしたら水野さんに怒られ

そうだし……」

水野「そうだよ〜ちゃんとチェックするから

ね〜」

陽斗「ハハッ。気を付けます！」

水野「フフッ。撮影頑張っただね。お疲れ様」

陽斗「お疲れ様でした！」

と、明るくスタジオを出る。

○同・駐車場・車内（夜）

陽斗「あゝづがれだあゝゝ」

佐藤「佐藤、運転席でシートベルトを締めな
がら、

佐藤「はい、シートベルトしてくださいねー」

陽斗「んー」

陽斗「起き上がってシートベルトを締
める。

佐藤「車を発進させる。

○道路・車内（夜）

佐藤「佐藤が運転する車内。

陽斗「窓に頭を預けて外の景色を眺め
る。

佐藤「最近陽斗さん自分から話しかけに行く
こと増えましたよね。人見知り克服したん
じゃないですか？」

陽斗「大きく伸びをする。

陽斗「マジ？　そう見える？」

佐藤「はい！」

陽斗「俺のせいでユニクラの印象が悪くなるのは絶対嫌だしね……俺、やればできる子だから」

佐藤、誇らしげな顔で頷く。

陽斗、照れ隠しするように、

陽斗「……ちよっと寝る」

佐藤「はい。もちろんです」

陽斗、胸の前で腕を組み眠りにつく。

○陽斗のマンション・車寄せ（夜）

佐藤、助手席の窓を開ける。外に立っている陽斗に声をかける。

佐藤「お疲れ様でした！明日八時に迎えに

来ます！」

陽斗「ありがとう。気をつけて」

佐藤、車を発進させる。

陽斗、車が見えなくなるまで見送って

エントランスに入る。

○同・ロビー（夜）

陽斗、郵便受けを開けて中身を取り出す。

○同・エレベーター内（夜）

順番に階が上がって行く。
チーンという音と共に27階に到着。
陽斗、エレベーターを降りる。

○同・陽斗の部屋・玄関（夜）

陽斗、ドアを開けて中に入る。
玄関には観葉植物と小さな絵が飾られている。
陽斗、鍵を置いてスリッパを履く。

○同・リビング（夜）

ウッド調の暖色系で統一された部屋。
陽斗、一通ずつ郵便物を確認してテーブルに置いていく。
マンションの管理会社からの封筒で手を止める。
白い紙を取り出して内容を読む。

陽斗「は……？」

書類は、「ご退去のお願い」というタイトル。

「倒産につき」「ご退去をお願いします」
く存じます」「期日は」という文言に
目が留まる。

陽斗、佐藤にメッセージを送る。

「陽斗…ちょっと緊急事態かもしれな

い」

すぐに既読がつく。

「佐藤…まさか、撮られました!？」

焦っているスタンプが送られてくる。

陽斗「ちげーよ」

と、笑う。

「陽斗…俺家がなくなるかも」

「佐藤…はい？」

首を傾げる動物のスタンプがくる。

陽斗「そうだよな、ワケ分かないよな」

陽斗、もう一度紙を見てから二つに折りたたむ。

陽斗「よし！明日考えよう！」

陽斗、紙を机の上に置く。

○事務所・談話スペース

無人のバーカウンターにはドリンクサー
バーとお菓子や軽食が並ぶ。

佐藤とチーフマネージャー・後藤孝弘

(35)、カウンターの前で「ご退去のお

願い」を読みながら立ち話。

佐藤は頭を抱え、後藤も険しい表情。

陽斗「お疲れ様です」

陽斗、佐藤たちに近づく。

後藤「おーお疲れさん。なんか大変なこ
なつたな」

佐藤「今チーフにマンションのこと相談して

て……」

陽斗「そうなんですよ……どうすればいいで

すかね……？」

佐藤「とりあえず実家に避難とか……？」

陽斗「できれば実家は避けたいな。迷惑かけ

るかもしれないし……」

後藤「……となると、ホテルかなあ」

その時、遠くからカツカツという足音が近づいてくる。

陽斗と後藤、足音の主を察した顔。

佐藤、足音の方向を見ると社長・宮本

徹（50）が奥から歩いてくる。

佐藤「社長！」

宮本「なになにどうしたみんな揃って！」

宮本、ハイテンションで寄って来て、

後藤と佐藤の肩に手を回す。

後藤「実は田中のマンションの管理会社が破

産申請したらしくて……すぐ退去しなきゃ

いけないになりました」

佐藤「とりあえず今は長期滞在できるホテルを探す方向で動こうかって……」

宮本「却下！ ダメダメ、ホテルは安全のよ

うで安全じゃないから！ 人の出入りが激

しいし、何かあったらホテルにも迷惑かけ

るしダメ！」

後藤「もちろんそのあたりはしっぴかり選
びますが……」

宮本「ひらめいた顔をする。

宮本「じゃあしばらくうち来ればいい
じゃん！ 部屋余ってるし、セキユリ
テイも万全だし、おまけに局も近い
から収録も行きやすい。バツチリ
じゃん！」

後藤と佐藤、口をポカーンとさ
せて目を合わせ。

後藤「（それはさすがに……）」

佐藤「（陽斗さんが可哀そうすぎる……）」

陽斗「……社長って確か娘さん
いましたよね……？」

宮本「いるよ可愛いわく見る？
写真見
る？ 見ちゃう？」

宮本「スマホで写真を見せよう
として止まる。

宮本「ハアッ！」

と、スマホの画面を隠して陽斗
を睨む。

陽斗「？」

宮本「真剣なトーンで」惚れるなよ？もし
万が一の手を出すようなことがあれば：：事
務所クビだぞ。いいな？」

陽斗「出しませんし惚れません！だって高
校生でしたよね娘さん！俺が心配してる
のはそういうことじゃなくて：：」

陽斗、言いづらそうにする。

後藤「田中が気にしてるのは、ほら。娘さん
に気を遣わせるだろうってことですよ。友
達に田中とかユニクラのファンがいるかも
しれないし。そしたら色々話したくなった
りするじゃないですか」

宮本、ギクツとする。

宮本「：：う、うちのえまはそんなことしな
い！」

後藤「もちろんそんなことはないとは思いま
すけどね：：？万が一ですよ万が一」

宮本「だっ、大丈夫大丈夫！えまは二次元
にしか興味ないし、周りもみんなアニメオ
タクだから陽斗どころかユニクラのことも

知らない！興味ない！そこらへんは全然心配いらないから！」

陽斗、納得していない顔。

後藤、困った顔で陽斗と佐藤を見る。

佐藤「（口パクで）チーフもって言うてくだ

さい！」

陽斗「（口パクで）頼みますよ！」

後藤「（口パクで）ムリムリ！こういう時

の社長は頑固だから何言っても聞かないん

だよ！」

と、手ぶり。

宮本「なあ後藤。いい案だろ？」

後藤、陽斗と佐藤をチラッと見る。

陽斗、後藤を促すように頷く。

佐藤「（口パクで）ファイト！」

後藤、頷く。

後藤「（営業スマイルで）……まあ確かに、色んな意味で社長のご自宅が一番安全かもしれないですよねえ！次の家が決まるまでの一時的なものですし……」

陽斗と佐藤、ぎよつとした顔で後藤を
見る。

後藤、気付かないフリ。

佐藤「で、でも社長。奥様に相談もなしで決
めちゃうのはマズいんじゃない？ それに
：
：
」

陽斗、佐藤を制する。

佐藤「!?」

陽斗「：：分かりました。社長、しばらくお

世話になります！」

陽斗、元気よくお辞儀する。

宮本「よし決まりだな！ひとまずすぐに必
要なものだけ持ってこい。な？」

宮本、嬉しそうに陽斗と肩を組む。

後藤、宮本の後ろで陽斗と佐藤に「ご
めん」と手を合わせる。

陽斗と佐藤、苦笑。

○宮本家・玄関（夜）

えま、薄い段ボールを抱えて帰って来

る。

えま「ただいまー！」

カーリー、嬉しそうに走って来る。

えま、しゃがんでカーリーを撫でる。

えま「カーリーーただいまぁ！」

○同・リビング（夜）

えま、制服のままソファに座る。

テレビで陽斗のドラマをつけがら薄い

段ボールを開ける。中には陽斗が表紙

の同じ雑誌が三冊。

えま、大事そうに抱きしめてドラマを

見る。

美香、リビングに入って来てえまを見

る。

えま「ママお帰り〜」

美香「ただいま〜！　ってちよつと〜制服シ

ワになっちゃうから脱いでから見なさい」

美香、キッチンへ行く。

えま「はーい」

えま、ドラマを止めて立ち上がる。

○ 同・えまの部屋（夜）

白を基調とした部屋。
ベッド、ローテーブル、机、椅子、棚、
クロゼットがある。
ローテーブルの上には作りかけのファ
ンサービス用うちわがある。
棚の中にはユニクラウンのCDやDV
D、陽斗のアクリルスタンドやブロマ
イド、雑誌、ユニクラウンの日めくり
カレンダーが綺麗に陳列。
えま、脱いだ制服をハンガーにかけ、
モコモコの部屋着に着替える。
鏡の前で髪の毛をハーフアップのお団
子にする。

○ 同・廊下（夜）

えまが廊下に出ると、カーリーが玄関
の前でドアを見つめて座っている。

えま「どうしたのそんな所で。外に誰かい
る？」

えま、しゃがんでカーリーを撫でなが
ら不思議そうにドアを見る。

○同・玄関外（夜）

宮本と陽斗、ドアの前に立つ。

宮本、鍵を開けようとして陽斗の方を
振り向く。

宮本「真面目に」一つ約束してほしいことが
ある」

陽斗「真面目に」はい：：」

宮本「娘の前では絶対に社長って呼ぶな。娘
には仕事の話してないんだ」

陽斗「予想外で」分かりました」

宮本、ドアに鍵を差し込む。回す前に
再び勢いよく振り返って、

宮本「脅すように」絶対に手エ出すなよ？」

陽斗、間髪入れずに、

陽斗「出すわけないでしょ！」

宮本、再び前を向いて鍵に触れる。回
そうとして、差し込んでいた鍵を抜く。

宮本「振り返って」美香にも惚れるなよ!」

陽斗、面倒そうに目を細めて、

陽斗「惚れるわけないでしょ」

宮本「惚れるわけないとはなんだ! 美香に

魅力がないって言いたいのか!」

と、陽斗に詰め寄る。

陽斗「(イライラして)いいから早く中に入れ

てくださいよ!」

陽斗、宮本から鍵を奪ってドアを開け

ようとする。

宮本、陽斗を止めようとして取っ組み

合いになる。

○同・玄関(夜)

宮本「ただいま」

と、ハイテンションで入る。

陽斗、宮本の後に続く。

陽斗「……お邪魔します」

えま、玄関の前でカーリーを撫でてい
る。

カーリー、宮本の後ろめがけて走って
行く。

えま「あ！ ちょっとカーリー！」

と、手を伸ばす。

陽斗「可愛いなあ。カーリーって言うのか？
ん？」

陽斗、しゃがんでカーリーを撫でる。

えま「ん？」

えま、宮本の後ろを覗き込もうとする。

宮本「えま！ パパのこと出迎えてくれる

なんて……一体何年ぶりだろう……」

と、手を広げる。

えま「面倒そうに」あーはいはい。そういう

のいいから」

宮本「そうだ紹介するよ。今日からしばらく

うちに住むことになった田中陽斗くんのだ！」

陽斗、宮本の後ろから顔を出す。

陽斗「……こんばんは」

と、会釈。

えま、勢いよく立ち上がりフリーズ。

えま「なっ……なんで陽斗くんがうちに!?

本物？ 本物だよね!? 私が陽斗くんを見

間違えるはずないし……あれ、なんか急に

めまいが……」

えま、フラツと後ろに倒れそうになる。

陽斗「ええっ!? ちょっ!」

陽斗、瞬時にえまの方へ走り出す。ス

ライディングでなんとかえまを抱きと

める。

陽斗「危なかった……」

えま「んっ……」

えま、うっすらと目は開いているが意

識は朦朧としている。

陽斗「大丈夫？ 分かる？」

えま、安心した顔になる。

宮本「えま! えま! 大丈夫か!?

と、えまに駆け寄る。

えま、うるさそうに眉を顰める。

美香「どうしたの？　すごい音したけど……」

美香、倒れているえまを見て、

美香「やだ、えま!?　大丈夫!?」

美香、陽斗の腕に抱かれたえまに駆け

寄る。

えま、小さく手を挙げて反応する。

陽斗「多分立ち眩みだと思います」

えま、心地よさそうな顔で意識を手放

す。

美香「陽斗くんありがとうね」

陽斗「でもすいません。靴のまま上がってき

ちゃって……」

美香「そんなの気にしないで」

陽斗「ベッドに寝かせた方がいいですよね。

俺このまま連れて行きますよ」

陽斗、えまを抱えて立ち上がる。

美香「あ……大丈夫よ。この人に運んでもら

うから！」

と、宮本を指差す。

陽斗「じゃあ、お願いします社長」

陽斗、宮本にえまを渡す。

宮本、えまを愛おしそうに見つめながら、

宮本「大好きな陽斗がいきなり目の前に現れたんだから、驚いて倒れるのも無理ないな」

美香「だから事前に話した方がいいって言ったのに！」

宮本「だってサプライズの方が嬉しいだろ？」
陽斗「ポカーンと」え……？」

陽斗、宮本と美香を交互に見る。

美香「ん？」

宮本「顔を逸らして」しまった……！」

陽斗「社長!? 娘さん二次元にしか興味ないんじゃない!? 俺のこともユニクラのことも知らないとか言っていましたよね!？」

宮本、焦り出す。

美香「信じられない! まさかあなた陽斗くんのこと騙して連れて来たの!？」

宮本「あ……あれえ、そんなこと言ったかな……? アハハハ」

宮本、逃げるようにえまを連れて行く。

美香、大きなため息をつく。

美香「陽斗くん、本当にごめんね。大丈夫、

あの子にはちゃんと行って聞かせるから」

陽斗「あはは……」

陽斗の表情が引きつる。

○同・えまの部屋（夜）

えま、ベッドで目を覚ます。

棚に飾られた陽斗のグッズが目に入る。

ゆっくり三回瞬きをして、ガバッと起

き上がる。

えま「頭を抱えて」夢だよね、まさかね……

あはは」

えま、そーっとドアを開けて廊下の左

右を確認する。

○同・廊下（夜）

えま、忍び足でリビングの手前まで行

き足を止める。

美香の声「陽斗くん本当にごめんね」

陽斗の声「いえ！俺の方こそ突然押しかけ
てすみません。しばらくお世話になります」

えま、大きく目を見開いて口を両手で
押さえる。
また忍び足で戻って行く。

○同・えまの部屋（夜）

えま、慌てて部屋の中に入る。
おろおろしながら鏡に映る自分の姿を
見る。顔はほぼすっぴん、髪型はちよ
んまげハーフアップ、モコモコの部屋
着姿の自分が映る。
えま、よたよた後ろに下がる。勢いよ
くクローゼットを開け、服を山盛り取
り出す。

えま「まず先に化粧！」

えま、ローテールで化粧をする。

○同・リビングダイニング（夜）

美香、ダイニングテーブルに座る陽斗に紅茶を出す。

陽斗「：：ありがとうございますございます」

美香「ごはんはもう食べた？」

陽斗「はい。食べてきました」

美香「お菓子とかも自由に食べていいからね」

えまの声「ママァー！ ちょっと来てえ

え！」

廊下の奥からえまの叫び声。

美香「あら、起きたみたい」

○同・えまの部屋（夜）

美香の声「えま？ 入るわよ？」

えま、美香の手を引っ張って部屋の中に入れる。

えま「ちょっと！ なんでうちに陽斗くんがいるの!? どういうこと!? ママは知ってたの!?」

美香「私も今日知ったのよ。しばらくお家がないからって、パパが連れて来たの」

えま「何がどうなったらそんなことになるわ

け!? それって一緒に住むってこと!? 陽

斗くんと私が!? この家に!?

えま、美香に詰め寄る。

美香「そうよ」

えま、胸を押さえて荒く呼吸する。

えま「：：ねえ。誰が私のこと部屋まで運ん

でくれたの？」

美香「陽斗く：：」

えま「ああー終わった：：」

と、頭を抱えて崩れ落ちる。

美香、クスクス笑って、

美香「陽斗くん：：じゃないから安心して。

本当は陽斗くんが運んでくれようとしたん

だけど、えまの部屋見られたくないだろう

と思っ、パパに運んでもらったから」

えま「なんだ良かったー！ ママナイス」

と抱きつく。

美香「あ、そうだ。家の中ではキャーキャー

言っちゃだめよ? じゃないと陽斗くん、

ここでも気を張って休まらないでしょ？」

えま「そ……そうだよね……私としたことが。

危ない危ない。ママ、ありがとう」

えま、美香の手を握る。

美香、よく分からずニコニコ笑う。

○同・リビングダイニング（夜）

陽斗、棚に飾ってある家族写真を見る。

写真には宮本の肩車で喜んでいる小さ

い頃のえまと、宮本の腕にぶら下がっ

ている幼い頃の兄・宮本類。隣でにつ

こり微笑む美香。

陽斗「仲良さそうだな」

えまが美香の後ろに隠れながらリビン

グに入ってきて来る。

私服に着替え、軽く化粧をして、髪も

巻いている。

えま、美香の後ろから顔を覗かせる。

えま「……はじめまして。宮本えまです」

陽斗「……あっ、と。しばらくこの家でお世話になります田中陽斗です……よろしくね」

えま、大きく深く頷く。

えま「さっきはお手を煩わせてすみませんでした！」

えま、直角に体を折りたたむ。

陽斗「……俺は全然いいんだけど、もう大丈夫？」

えま「……はい、大丈夫です！」

陽斗「……そっか。良かった」

えま、瞳を潤ませてふやけた顔になる

美香、えまに向かって、

美香「（口パクで）かーお！」

と、ジェスチャーする。

えま、自分の頬をぺちっと叩いて首を振る。

陽斗、不思議そうな顔でえまを見る。

美香、えまを見てクスクス笑う。

○ 同・廊下（夜）

美香、陽斗を連れて家の中を案内。

えま、二人の後ろをついて行く。

美香「ここが陽斗くんの部屋ね。狭くてごめ

んね」

美香、部屋のドアを開けて中を見せる。

十五畳ほどの広さ。ベッド、テーブル、

デスク、椅子、本棚がモノトーンで統

一されているシックな部屋。

陽斗「苦笑」いえ、十分すぎます。この家具

とかって元々あったんですか？」

美香「ここ息子の部屋だったんだけど、もう

しばらく使っていないの。本当はもう少し広

かったのに、えまが自分の部屋をもっと広

くしたいって言って急遽壁の位置を変えた

からこっちは狭くなっちゃって」

えま「（小声で）ちよっと！ 余計なこと言わ

ないですよ！」

美香、笑いながら、

美香「この子の部屋隣だから、うるさかった

りしたら遠慮なく怒っていいからね」

えま、ばつが悪そうにする。

○同・リビングダイニング（夜）

えま、ソファに座ってユニクラウンが
出ている音楽番組の録画を見ている。
陽斗がリビングに来たのに気づき慌て
てテレビを消す。

陽斗、気まずそうに、

陽斗「俺のファンだって聞いたんだけどさ…
：　　：　　：　　こうやって気遣わせるのも悪いし、しゃ
：　　：　　：　　お父さんに俺と一緒に住みたくないっ
て言いなよ。愛娘が嫌がっているとすれば、
多分考えも変わると思う」

えま「ごめんなさい…：　　：　　テレビとか、次から
気をつけます。すみませんでした！」

と、頭を下げる。

陽斗「…：　　：　　別に怒ってるわけじゃなくて…：　　：
ごめん、俺人見知りだから、怒ってるよう
に見えるよね」

えま「人見知り、もちろん知っています！」

と、嬉しそうに頷く。

陽斗、怪訝な顔をする。

えま、しまったという顔。

陽斗「……イメージと違うってがっかりされるのも嫌だし。早めに言ってくれと助かるかな」

えま、陽斗に手のひらを向ける。

えま「安心してください。私はアイドルのはる……田中さんの顔と体にしか興味ないので！今日の前にいる田中さんは、私にとって全国の田中さんと同じ、ただの田中さんです！だから、どうか何も心配せず、自分の家だと思ってくつろいでください！」

えま、ドヤ顔をする。

陽斗（小声で）それはそれで複雑なんだけど……さすが社長の娘」

えま「え？今何か言いましたか？」

陽斗（首を横に振って）いや……別に」

陽斗、背を向けてリビングを出ようとする。

えま「あっ！　大事なこと言い忘れました！」
陽斗、振り返る。

えま「声も！　田中さんの歌声も大好きです！」

陽斗「フツと笑って」……そりゃどーも」

と、歩いて行く。

えま、満足そうな顔。

○同・キッチン（朝）

美香、朝食の用意をする。

えま、それを手伝う。

美香「えま、陽斗くんに飲み物何がいいか聞いてきて」

えま「えッ……」

○（えまの妄想）同・陽斗の部屋（朝）

ベッドで眠る陽斗。

えま「陽斗くん朝ですよ。起きてー」

えま、陽斗をトントンして起こす。

陽斗「んっ……もう朝？」

陽斗、ゆっくりと目を開ける。

えま「（微笑んで）早く起きないと遅れちゃいますよ？」

陽斗「俺二度寝するから……」

と、目を瞑る。

えま「ええっ!? でももうマネさん来ちゃいますよ！」

陽斗、面倒くさそうな顔をして、

陽斗「……いいから」

と、毛布の中から手を伸ばし、えまを毛布の中に引き込む。

えま「キャッ！」

えま、抱き枕のように陽斗の腕の中に収まる。

陽斗、心地よさそうに眠っている。

えま、陽斗の寝顔にときめく。

○同・キッチン（朝）

えま「陽斗くんダメ！ 私には刺激が強すぎるよッ！」

えま、ニヤけた顔を手で覆いながら体をくねらせる。

美香、えまの顔から手をどける。

美香「変な妄想してないで、早く行って来て！
陽斗くんもう起きてるから！」

えま、気恥ずかしそうな顔をして、
えま「はあい……」

○同・洗面所前（中（朝））

えま、洗面所の前に来ると眼鏡をかけ
た陽斗が廊下を歩いてくる。

えま、嬉しそうにはっと口元を手で覆
う。

陽斗「……はよ」

陽斗、眠そうな掠れた声。

えま「……おはようございます！」

陽斗、洗面所の中に入り洗面台の前に
立つ。

えま、扉から覗くように立って見守る。
陽斗「……もしかしてここ使う？」

えま「いや使いません！　どうぞ！」

陽斗、水を出して顔を洗い始める。

えま「(呟くように)……一生見てられる」

えま、うっとりした顔で陽斗を見つめ

る。

陽斗、鏡越しにえまと目が合う。

陽斗「……なんかある？　見られてるとやり

づらいんだけど……」

えま、我に返る。

えま「ごめんなさい！　えっと、ママが朝の

飲み物何がいいかって」

陽斗「……みんないつも何飲むの？」

えま「私とママはコーヒーです」

陽斗「じゃあ俺もコーヒーでお願いします」

えま「分かりましたあ……」

えま、離れたくなさそうにギリギリま

で陽斗を見ながら洗面所を後にする。

陽斗、えまの様子に失笑。

○同・リビングダイニング(朝)

ダイニングテーブルにはサラダやハム
エッグが乗った四人分のお皿が並ぶ。

陽斗「おはようございます」

美香「おはよう陽斗くん。よく眠れた？」

陽斗「はいぐっすりでした。これ運びますね」

美香「ありがとう！」

陽斗、キッチンカウンターのコーヒ
を運ぶ。

× × ×
宮本、美香、陽斗、えまの四人で朝食
を食べる。

宮本「陽斗、今日の予定は？」

陽斗「今日はスタジオ収録の後そのままロケ
です。(美香の方を見て)あ、なので帰り
遅くなります。ごはんも大丈夫です」

えま「私も今日バイトだから遅くなるよ。
夜もお店でサンドイッチでも食べてくるか
らいいや！」

陽斗、何か聞きたげな顔でえまを見る。
えま、トーストを食べようとして口を

開けている。陽斗の視線に気づいて固まる。

えま「!?」

陽斗「……ごめん」

と、コーヒーを飲む。

宮本「バイトなんてしなくても、欲しい物は

なんでもパパが買ってあげるぞ？」

美香「ダメよそんな甘やかしちゃ！」

えま、陽斗を気にしながら小さくト

ストをかじる。

○同・廊下（朝）

えまと陽斗、同時に部屋から出てくる。

陽斗「！」

えま「！」

陽斗、そのまま玄関へ向かう。

えま、耳に入れたワイヤレスイヤホを

そっと外して後ろをついていく。

○同・玄関（朝）

美香、カーリーを抱いて見送りに来る。

美香「二人とも気をつけてね」

えまと陽斗「行ってきます」

○同・エレベーター内（朝）

えまと陽斗、角と角に立つ。

チラッとお互いを見て目が合い、気ま
ずそうに前を向く。

陽斗「バイトさ」

えま「あの……」

えまと陽斗、同時に喋り出す。

陽斗「あ……」

えま「すいません！ はる……田中さん先に

どうぞ」

陽斗「……いや、バイト、何やってるのかな

って……」

えま「バイトはカフェです。うちの近くにあ

る『ミラベル』ってところで。コーヒートか、

あとオリジナルのドリンクとか美味しいん

ですよ！ 今度良かったらぜひ……」

陽斗「：：そうなんだ」

えま「はい：：」

陽斗「：：あ、どうぞ。何か言いかけてたよ

ね」

えま「あ：：なんだっけ：：」

陽斗、気まずそうに階の数字が下がっ

ていくのをじっと見つめる。

エレベーターが着いて扉が開く。

陽斗、開けるボタンを押してえまに先

に降りるよう促す。

えま「ありがとうございます」

えま、エレベーターを降りる。

○同・エントランス（朝）

壁に水が伝っていて、ソファがいくつ

もある広々とした空間。

陽斗「：：じゃあ俺はここで」

えま「はい。お仕事、頑張ってください！」

陽斗「：：学校、頑張ってるね」

えま（笑顔で）ありがとうございます！ 行

ってきます！」

えま、お辞儀して歩いて行く。

陽斗、えまの背中を見ながら「ふう」

と息を吐く。

○住宅街・歩道（朝）

えま、周りに誰もいないことを確認する。

えま「やばいやばい。どうしよう！ 陽斗く

んにお仕事頑張ってたって言っちゃった」

えま、飛び跳ねながらぐるぐる回る。

角から人が来るのが見えて、何事もな

かったかのように大人しく歩き出す。

すれ違ってから立ち止まる。

えま「しかも、『学校頑張ってたね』だって」

「この先大丈夫かな？ 私の心臓もたない

んじゃない!？」

頬に手を当てて百面相するえまを、通

行人が不思議そうに見る。

（了）